【紹介史料】

新島 襄先生より横田安止氏宛書状

― 所謂「良心碑」の書状―

二期生 淡路博和

▼良心碑の碑文

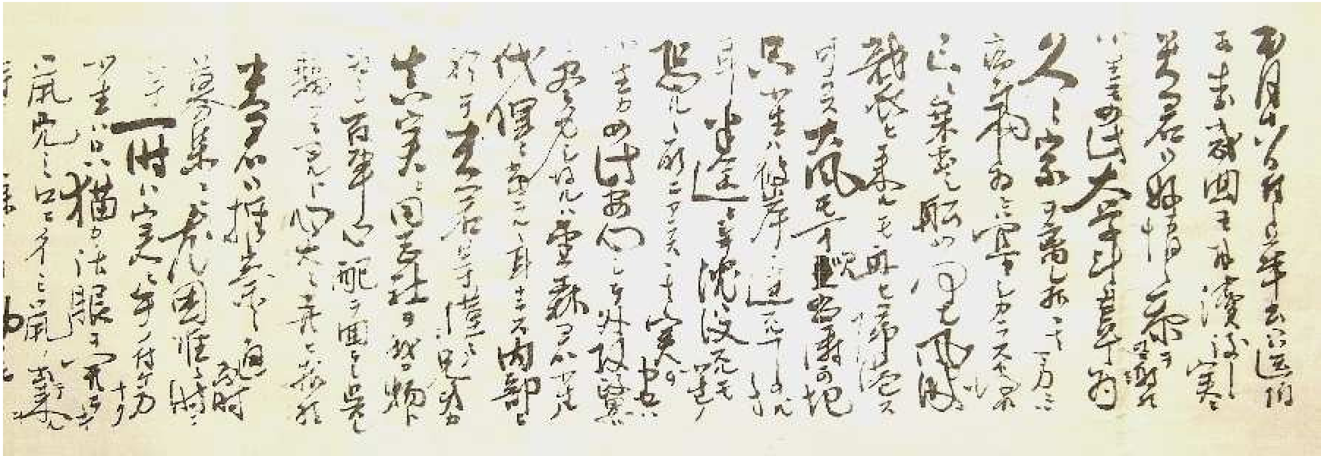
「良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」

▼この一節を刻んだ石碑は「良心碑」と言われ、たいへん有名です。新島学園の正門を入った玄関脇にも立っておりますから、多くの人たちがご存知の碑であります。

この碑文は、新島襄先生が同志社英学校の学生横田安止(やすただ)氏に送った書状の中の一節であります。明治二十二年(一八八九)十一月二十三日付で東京から発信したもので、この書状の原本は学園にはありませんが、複製が学園にあり、下の写真はそれを撮らせていただいたものです。筆がかすれて見にくい部分もありますが、下段に解読文を付して置きました。難読文字には読み仮名をつけ、また3ページには意訳文も載せましたのでご覧ください。

当時の新島先生は同志社大学開設のため、各地を回って精力的に募金活動を展開しておりましたが、この書状を書いた翌年の一月二十三日に永眠されました。同志社大学開設への先生の並々ならぬご決意が表明された記念すべき重要な書状であります。

1

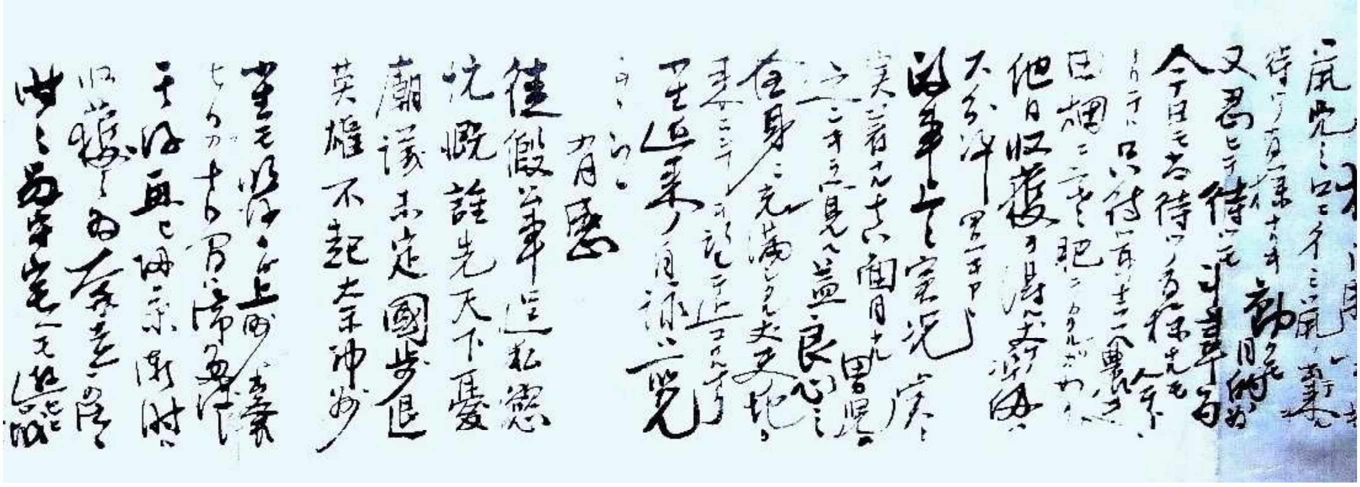


▼上の書状の解読文・・

改行は写真と同じにしてあります。

本月十八日付之(の)華書御送附
相成(あいなり) 幾回モ拝読致し、実ニ
貴君御好情之(の) 忝(かたじけなさ) ヲ 奉謝(しゃしたてまつり) 候(そうろう)。
小生モ如此(かくのごとく) 大学計畫之為(のため)
久々家ヲ離レ居 候者(おりそうろうは)、一方ニハ
病氣之為ニハ 宜(よろ)シカラズ候 得共(そうらえども)
已(すで)ニ乗出シ船 如何(いか)ナル風波
襲ヒ来ルモ再ビ帰港ス
可(べか)ラズ。大風モ可吹(ふくべし)、怒濤可起(おこるべし)
耳(のみ)。半途ニシテ沈没スルモ小生ノ
恐ル丶所ニアラズ。其実(そのじつ)ヲ申セバ
小生ガ如 此(かくのごとく) 安心シテ外攻政略
ニ尽力シ得ルハ、金森君 小生ノ
代理ニ當(あた)ラル丶耳(のみ)ナラズ、内部ニ
於テ貴君等僅々ノ兄弟ガ
真実ニ同志社ヲ我ガ物ト
為(な)シ、百事心配ヲ回(めぐ)ラシ呉(く)レ
賜フニヨルト 心大ニ喜ビ 居候(おれそうろう)。
貴君御推察之通(のとおり)、当時
募集ニハ 尤(もっとも) 困難之時ニ
シテ、一時ハ実ニ手ノ付ケ方ナク
小生ハ只(ただ)猫ガ活眼ヲ開ラキ
鼠穴之(の)口ニ イ(たたず)ミ、鼠ノ出テ来ルヲ

2



▼上の書状の解読文です。

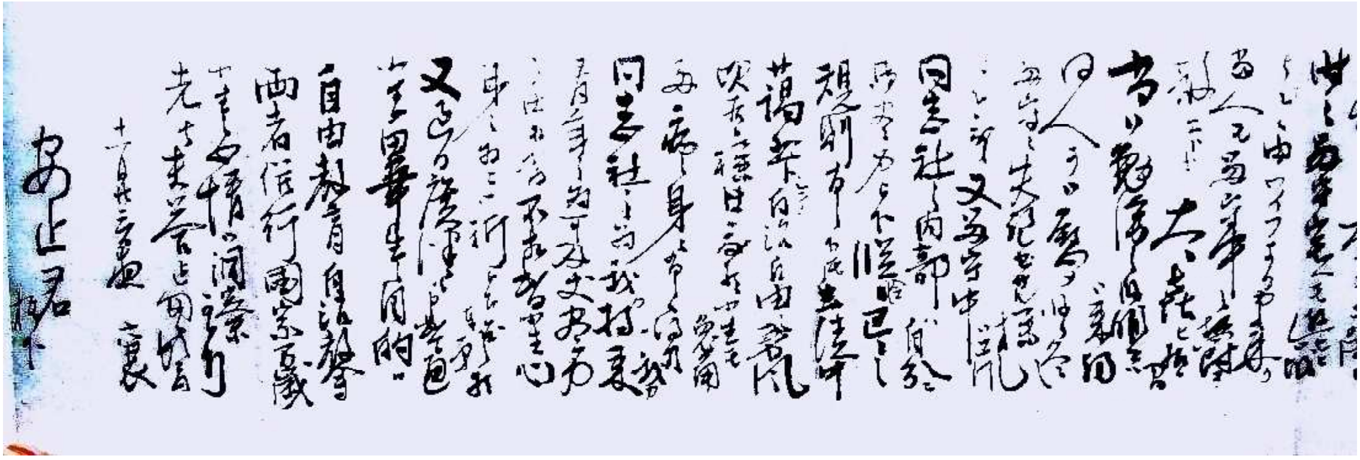
鼠穴之(の)口ニ　イ(たたず)ミ、鼠ノ出テ来ルヲ
待ツノ有様ナリキ。動クモ目的ノ為(ため)
又忍ビテ待ツモ計畫之為(のため)、
今日モ尚(なお)待ツノ有様ナルモ、今ト
ナリテハ只(ただ)待ツ耳(のみ)ナラズ、農夫ガ
田畑ニ寒肥ヲカクルガ如ク、
他日収穫ヲ得ル丈(だけ)ケノ準備ハ
大分致シ置キ　申候(もうしそうろう)。
政事上之実況ハ実ニ
実着ナル真面目ナル男児ノ
乏シキヲ覚へ、　益(ますます)　良心之
全身ニ充満シタル丈　夫(ますらお)ノ起リ
来ラン事ヲ　望(のぞみ)テ止(や)マザルナリ。
小生近来ノ自詠(じえい)　御一覧
可　被　下　候(くださるべくそうろう)。

有感　(5ページの上・中段参照)

徒假公事逞私慾
忼慨誰先天下憂
廟議未定國歩退
英雄不起奈神洲

小生モ明後日ヨリ上州へ出発、
七日カ十日間ハ滞留致し、
其後再ビ帰京、漸時ハ
収穫之為(のため)、奔走可　仕　候(つかまつるべくそうろう)。
時々　留守宅へモ遊ビニ御越

3



（↓前ページ下段の写真の解読文です）

時々　留守宅へモ遊ビニ御越
被　下　候　由、ワイフより申来リ、
当人モ留守中之欝ヲ
散ズト　申、大ニ喜ビ居候間、
尚御勉強之餘暇ニハ御来訪
同人ヲ御慰メ、餘リ久々之
留守ニ失望セザル様御工風
被　下　度候。又留守中
同志社之内部ハ自分ニ
御尽力　被下、縦令区々之
規則有之候トモ、生徒中
藹　然トシテ自治自由之春風
吹居　候様仕　度候。小生モ兎角
多病之身ニ有之候　得　共、我ガ
同志社之為、我ガ将来
青年之為、可　及　丈尽力
可　　仕候間、不相替小生心
身之為ニ御祈被　下　度奉　願候。
又過日　廣津ニも申　遣侯　通
小生　畢生之目的ハ、
自由教育　自治教会
両者併行　国家万歳
小生之心情御洞察可　被　下　候。
先者貴答迄、匆々頓首
十一月廿三日夜　襄
安止君
梧下

▼次に書状の意訳文を左に掲げます。

本月十八日付きの華書をご送付いただき幾回も拝読致し、実に貴君の御好情の忝なさを感謝致しました。
小生も、このような大学計画のため久しく家を離れますが、病氣のためには良くはないと思っていますが、すでに乗り出した船、どんな風波が襲って来ても、再び港に帰ることは出来ません。大風よ来い、怒濤も起れ、ただ小生は彼岸に達することを知るだけ。半途にして沈没するも小生の恐るる所ではない。本当を申すならば、小生がこのように安心して外攻政略に尽力できるのは、金森君が小生の代理に当たっているだけではなく、内部にあって貴君ら兄弟たちが真実に同志社を我が物として、すべての事に心配をめぐらしてくれているからで、大いに喜んでおります。
貴君のご推察の通り、今は学生募集にはもっとも困難な時でして一時は実に手の付けようもなく、小生はただ猫が活眼を開いて鼠の出入りする穴の口にたたずみ、鼠の出て来るのを待つだけの有様です。動くのも目的のためまた忍びて待つのも計畫のためです。今日もなお、待っている有り様ですが、今となってはただ待つだけではなく、農夫が田畑に寒肥をかけるように、他日の収穫を得るための準備は大いに致しております。
政事上の実況は、まことに実着で真面目な男児が乏しいことを覚えております。ますます良心が全身に充満した丈夫が起こって来ることを望んで止みません。
小生の近来の自詠をご一覧ください。

有感　　（5ページの上・中段参照）

徒假公事逞私慾
忼慨誰先天下憂
廟議未定國歩退
英雄不起奈神洲

小生も明後日から上州へ出発し、七日か十日間は滞留いたし、その後は再び帰京します。しばらくは収穫のために奔走しなければなりません。
時々は私の留守宅へ遊びにお越しくださる由、ワイフから話しを聞きました。当人も留守中の憂さを散ずることができると、大いに喜んでおりますので、お勉強の余暇にはおいでくださり、同人を慰めてやってください。餘りに長い私の留守に失望しないように、ご工夫してくださるようにお願いいたします。
また留守中は、同志社の内部のことにもご尽力ください。たとえ細々とした

規則があったとしても、生徒たちが活発でしかも和らいで、自治自由の春風が吹いているようでありたいものです。小生も とかく多病の身ではありますが、我か同志社のため、我が将来の青年のため、出来る限りの尽力をしなければと思っておりますので、変わることなく、小生の心身のためにお祈りしてください。また過日は広津にも申しつかわしました通り、小生 畢生の目的は

自由教育 自治教会
両者併行 国家万歳

小生の心情をご洞察ください。
まずはご返事までにて、匆々頓首

十一月廿三日夜　襄

安止君
梧下

▼新島先生の同志社に対する熱誠なる心情が、ひたひたと伝わってくるような書状ですね。

▼新島 襄全集8巻「年譜編」によりますと、この書状を書く前の同年十一月十六日、先生は風邪を引き、寝込んでしまい福島方面への旅行は中止し、東京南鍛冶町の「茂林館」に宿を移して休養することになりました。その間も来客・交信があり、募金のこと・各地でのキリスト教伝道の様子など、神経の休まることはなかったようです。風邪が治らず医師の来診を受けもしました。そんな中で書かれたのが、横山 安止(やすただ)氏宛のこの書状だったのです。

▼この手紙を出されたあと、幾分気分も良くなった先生は、同月二十五日東京から前橋に参り、関農夫雄氏方に宿をとり、当時の群馬県知事佐藤与三氏や前橋町長松本真三氏、前橋の銀行の有力者などと会って募金の趣旨を説明致しました。また前橋の臨江閣(りんこうかく)では、前橋町役人六十人に講演をしたり、アメリカ人宣教師ミス・シェッド共愛学園教師の夕食会にも招かれたり致しました。しかし寒さのため腹痛を起こし、二十九日には胃腸カタルで苦しみました。

　このため前橋・高崎での募金活動は頓挫し、上州での募金は湯浅治郎氏（安中）に任せて、十二月十三日東京に戻りました。募金を断念して帰京することがとても残念だったのでしょう。次の漢詩はその頃の作品です。

秋風蕭颯渡刀川
欲去尚看両野天
新雁不知孤客意
声々鳴到赤峰辺

　秋風蕭颯(しょうさつ)　刀川(とうせん)を渡る
　去らんと欲して尚看(なおみ)る両野の天
　新雁(しんがん)は知らず孤客の意
　声々(せいせい)鳴いて到る 赤峰(せきほう)の辺

この詩には先生のお心がよく表れていて、上州や赤城の名もあって私の好きな漢詩です。

▼ところが、横浜方面での募金が進まないことを知った先生は、養生も兼ねて神奈川の大磯に行くことになりました。十二月二十七日大磯の百足屋(むかでや)に到着、静かな離れ家が気に入り、八時間も眠られたそうです。その時の自詠に、

「初めて大磯の宿に浪の声きさて・・
　いにしへの人も夢間に聞きしてん
　　磯に砕たける浪の声こへ」

▼そして百足屋で明治二十三年(一八九〇)のお正月をお迎えになったのです。

　この時の様子を「甚だ静にして来客一人もなく春の様にも被思不申候(おもわれもうさずそうろう)、本日は朝より詩などを作り書き初めをなし、大いニ楽しみ申候」と新島襄全集4巻に記してあります。そして元旦の作として、次の漢詩を作られたのであります。

送歳休悲病羸身
鶏鳴早已報佳辰
劣才縦乏済民策
尚抱壮図迎此春

　歳を送りて悲しむを休(や)めよ 病羸(びょうるい)の身
　鶏鳴早く已(すで)に佳辰(かしん)を報ず
　劣才縦(たと)へ済民の策に乏しくとも
　なお壮図(そうと)を抱(いだ)いて此の春を迎ふ

▼こうして先生は幾つかの漢詩を書したり作ったりして弟子達に贈りましたが、一月十七日、医師からは甚だ重体である旨を告げられ

ました。二十日夜十一時頃、八重子夫人が到着。二十一日午前五時、八重子夫人・徳富猪一郎氏・小崎弘道氏を先生は枕元に呼び、同志社や日本傳道のこと、続いてハーディ夫人ら友人知己に対する遺言を二時間にわたり述べ、徳富氏が筆記しました。とくに日本傳道に関しては日本地図を開かせて傳道計画を説明されました。

▼そして二月二十三日（木）午前三時頃、見舞いの者たちを一室に集め、いちいちその手を握り別れを告げ、午後二時二十分頃、「平和、喜び、天国・・・」という言葉を呟きながら永眠につきました。病名は「急性腹膜炎」とのことです。

先生は天保十四年（一八四三）正月十四日（陽暦二月十二日）巳の中刻（午前十時頃）にお生まれになり、永眠されたのが明治二十三年（一八九〇）一月二十三日でしたので、四十七年のご生涯でありました。したがってここにご紹介致しました書状は、新島先生が永眠されるちょうど二か月前のものであります。

▼この横田氏宛の書状に載っている先生の漢詩の読みを左に掲げました。

有感　　（２ページ中段より）

徒假公事逞私慾
忼慨誰先天下憂
廟議未定國歩退
英雄不起奈神洲

感有り（かんあり）
徒（いたずら）に公事（こうじ）に假（か）して私慾（しよく）を逞（たくま）しうし
忼慨（こうがい）誰か先（さき）んじて天下を憂（うれ）へん
廟議（びょうぎ）未（いま）だ定まらずして國歩（こくほ）退（しりぞ）き
英雄起（た）たずんば神洲（しんしゅう）を奈（いか）んせん

この中の「廟議未定國歩退とは、十月二十五日に黒田清隆が総理を辞職し、内大臣三条実美が総理を兼任する事態を表していると見るべきであろう」と新島 襄全集４巻 書簡編Ⅱ、四七一頁に記されております。

▼最後に、この書状の受取人横田安止（やすただ）氏について、「同志社山脈」（現同志社大学神学部教授・神学博士本井康博氏著）によって紹介してみます。なお「横田安止」の項は、河野仁昭氏（元同志社社史資料室長）の執筆であります。

横田安止氏は慶応元年（一八六五）、肥後国熊本（熊本市）に生まれました。漢学を学んだのち上京し、神田駿河台にあった大学進学予備校の成立学舎（せいりつがくしゃ）に入学しましたが、明治十八年（一八八五）、同志社英学校に移り、明治二十三年（一八九〇）に卒業、徳富蘇峰（とくとみそほう）氏の知遇を得て新聞記者となり、日清戦争にも従軍いたしました。

その後は大阪第百銀行に入り銀行業に従事しておりましたが、横浜市にガス局が設けられるとそこに勤め、ガス局長を最後に銀行業に復帰しました。やがて九州商業銀行大阪支店長や横浜貯蓄銀行副支配人などを歴任しましたが、大正十二年（一九二三）に貯蓄銀行が経営破綻。その後は横浜で茶と糸の小売店を営んでいましたが、昭和十年（一九三五）チフスに罹った家族を看病していて感染し、七十年の生涯を閉じました。

横田安止（やすただ）氏は新島先生を敬慕し、先生の健康を人一倍心配しておったそうですが、今回掲載致しました手紙の中の一節、

「良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」

この「良心碑」の建立で、横田氏はたいへん有名になりました。左の写真は「同志社山脈」から採らせて頂きました。

▼新島学園には柏木義円牧師宛の横田氏の書状がありますので、後日紹介してみたいと思います。優しい同氏のお心が表れているような、そんな書状であります。

以上

●附　記

▼新島学園高等学校の玄関北脇に立っている良心碑の正面碑文　（表紙の写真参照）

> 良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ

▼良心碑の裏面文字

> 新島先生生誕一五〇周年祈念
> 新島精神と建学の理念を同じくする新島学園と同志社の友情が深まることを祈念いたします
> 一九九五年二月十四日　　同志社総長　松山義則

▼良心碑の数

二〇一一年九月二七日に同志社大学神学部教授 本井康博先生から教えて頂いた良心碑の所在地です。

計　八基　（順不同）

同志社大学今出川校地	一基
同　京田辺校地	一基
フィリップスアカデミー	一基
同志社香里中高	一基
同志社国際学院	一基
同志社小学校	一基
新島学園中高	一基
高崎自然歩道	一基

▼この内、同志社大学今出川校地の良心碑が最初で、昭和十五（一九四〇）年十一月二十九日の同志社創立六十五周年記念日に、新島先生永眠五十周年を記念して建てられました。

← 同志社香里中高の「良心碑」

碑は碓氷の安山岩・台石は三波石
安中で刻まれ、昭和三十五（一九六〇）年建立

ボランティアメンバー

淡路　博和　2期
白石　幸晴　9期
小板橋　治徳　11期
清水　博　11期
真下　正雄　15期

二〇一〇年一〇月五日（火）
調査整理開始以来
ほぼ週一回宛調査

この拙文につき疑問や補正がありましたら、左にメールをいただけましたら幸いです。

awajii@sep.email.ne.jp
淡路博和

夢故園花　学園収蔵史料紹介誌
第三号　（非売品）
発行日　二〇一一年一〇月三日
編　集　秋池いづみ　新島学園教諭
発　行　淡路博和
印　刷　新島学園